

◇ 卷頭言 ◇

浅 海 重 夫

今年はお茶大創立百周年、日本地理学会発足五十周年にあたる。百年の歴史は明治維新以来の日本のおゆみであり、五十年は昭和の時代をあらわしている。いまわれわれの日々はそのような区切りの時期を迎えていると言えよう。

来年はモスクワで国際地理学会が開かれるので、これまでソ連というと敬遠しがちであった人達もこの機会に出かけてみようという準備をはじめているようである。またお茶大では来年度から、かねての目標であった博士課程大学院が実現しそうな運びとなった。これは従来の修士課程の終了者に3年間の研究コースを開くもので、指導組織の上では大講座制をとる新しい方式が考えられている。また新制女子大学としては最初のドクターコースである。目標の実現は喜ばしいことであるが、いままで定員6名のマスターコースにも応募者数が2~3名どまりであった地理学科では、これから何名の応募者、就学者、そして研究生活を長くつづける者が出るであろうか。来年度の大学院構想は人間文化研究科という課程（比較文化学……文化構造、社会構造、言語・芸術文化論など……と人間発達学……人間の身心発達に関する分野……をふくむ）にしばられており、自然地理学の関係する総合環境学は理学部の諸学科とともに第2期構想に入ることになる。しかし第1期構想すなわち来年度にはじまる比較文化という中心テーマは、これこそ地理学の本質そのものであるとも言えるので人文・自然を問わず研究題材は豊富に選択できよう。

またこの新大学院のねらいの1つとして、いわゆる生涯教育が目ざされている。卒業後家庭をもち子供を育て、その間学究活動を望みながらも果せなかった女性に、具体的には子供に追われる生活から解放される頃に開かれる門戸にしようとの趣旨である。ただそのためには、たとえ地理学からしばらくはなれていたとしても、専門と外国語の入試に合格してもらわなければならない。プラン倒れにならないことを願うものであるが、その意味で博士課程大学院の実質的成否は就学を希望する諸姉の活躍にかかっている。

終戦後婦人参政権がフェミニストの努力ではなく天下りで与えられ、最初の総選挙では多数の婦人議員が出たが、その後女性全般の政治意識が健全に向上しているとは必ずしも言えない。職場に社会活動に女性の進出をはばむのは一部の女性の無自覚といわれても仕方のない例がある。要は意欲と責任感の問題ではなからうか、社会に対しても自己の選んだ学問の道においても。